修士論文（要旨）
2011 年 1 月

介護実習における学生と施設入居高齢者との関わり
－学生の肯定的体験プロセスの分析－

指導　長田久雄　教授

老年学研究科
老年学専攻
２０９J６００３
増田いづみ

目　　次

Ⅰ．問題の所在と研究の意義・目的
１．問題の所在 ····· 1
１）介護福祉教育におけるコミュニケーション教育の位置づけ····· 1
２）介護福祉教育おける実習の特徴····· 2
３）実習における学生のコミュニケーション関する不安・戸惑いについての先行研究····· 3
４）介護実習体験についての先行研究····· 4
２．研究の意義 ····· 4

Ⅱ．研究の目的 ····· 5

Ⅲ．研究の方法 ····· ···· 5
１．研究デザイン ····· 6
２．データ収集の時期および方法 ····· 7
３．質問項目 ····· 7
４．分析方法 ····· ···· 7

Ⅳ．倫理的配慮 ····· ···· 8

Ⅴ．研究の分析結果
１．プロセスの全体像 ····· 8
２．概念の構成 ····· 12
１）コアカテゴリー１【見知らぬ施設での消極的な動機】····· 12
２）コアカテゴリー２【感情を察知し手探りながらあきらめない】····· 14
３）コアカテゴリー３【成功感・自己改革】····· 18

Ⅵ．考察
１．介護学生と施設入居高齢者との関わりの肯定的体験について····· 20
２．今後の実習指導教育への応用について····· 24

Ⅶ．研究のまとめ・今後の課題····· 27

謝辞
文献
資料

Ⅰ．問題の所在と研究の目的

1987（昭和 62）年に介護福祉士は、「社会福祉士及び介護福祉士法」で定義され、名称独占、専門的知識および技術をもって、身体または精神上の障害があり日常生活を営むのに支障がある者に、入浴、排泄、食事のその他の介護を行い、その介護者に対しても介護に関する指導を業とする者と規定されていた[1)]。しかし、2007（平成 19）年に定義規定の見直しがあり、「身体または精神上の障害があり日常生活を営むのに支障がある者に、入浴、排泄、食事のその他の介護を行い」の部分が「心身の状況に応じた介護」と再規定された[1)]。これは、認知症高齢者への対応や全人的ケア、個人の尊厳など身体的介護のみならず、利用者の心理的・社会的な課題をも視野に入れた介護のあり方を創造していくことが、介護福祉士に求められたといえる。その背景には、人材の養成について、2006（平成 18）年 7 月に厚生労働省の検討会で報告書[2)]が提出され、その中で、高齢者および障害者に対する新しい介護福祉の専門職の中心的役割を担うために「求められる介護福祉士像」[2)]が示された。「求められる介護福祉士像」には、尊厳を支えるケアの実践、他職種協働によるチームケア、コミュニケーション能力などを盛り込んだ 12 項目から構成されている。しかし、介護福祉士の資質、習得および向上を図るためには、教育のプロセスの水準を一定化、統一する必要性から、「求められる介護福祉士像」の基礎的能力である「資格取得時の介護福祉士養成の目標」[2)]の 11 項目が提示されている。その主な内容は、他者への共感ができ、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につけること、そのための知識・技術の習得や実践、介護の根拠の理解、円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につけるなどが盛り込まれている。本来、介護とは、相手との関係づくりの中からその人の思いを聴き、受け止め、その人の望む生活を築き上げていくプロセスであると言える。その介護には、高齢者や障がいをもつ人やその生活を支える家族や多職種とのコミュニケーションをなくしては行えず、介護する者のコミュニケーション技術は高齢者や障がいを持つ人の生活に大きな影響を与えること、そのコミュニケーションの重要性を認識している介護者は多いが、現状では介護者の人間性に委ねられているところもある[3)]と指摘する声もある。

一方、コミュニケーションの教育は、従来、実習指導や介護技術等などの科目の一単元として盛り込まれていたものが、2009 年の介護福祉士養成教育のカリキュラム改正[7)]を受けて単独の科目となり、時間数の増加と共に、より一層の教育内容の充実が図られた。しかし、2009 年以降のコミュニケーション教育に関しての成果ついてはまだ評価に至っていないのが現状である。学生は、コミュニケーションについては学内で学ぶ知識の他に、福祉施設の現場で行う実習がある。慣れない施設での実習は、学生にとって緊張や不安を伴うものである。先行文献では、学生の実習の不安や戸惑いの現状とその低減策[4) 5)]、コミュニケーション教育の必要性[6) 7)]などについて明示されているが、高齢者との関わりの肯定的体験の実態に迫ったものは見出せなかった。また、現実の実習では、学生は、施設指導者から、「コミュニケーションをとっていて」と指示はされるが、具体的な指導はなく、自分で模索しながらコミュニケーションを図っている。

研究は、学生が、施設入居高齢者との関わりで肯定的体験を得て実習全体に対する印象もしくは評価を良好と感じるプロセスを明らかにすることを目的としている。高齢者と関わる体験をとおして感じていることや、肯定的体験を構造化することは、今後の実習指導教育の知見及び高齢者とのコミュニケーション教育に役立てることができると考える。

Ⅱ．研究方法

分析焦点者は、介護実習最終段階を経験した介護福祉専攻３年生とし、施設入居高齢者との関わりの肯定的体験プロセスを M-GTA[8] を用いて分析を行った。調査は研究に同意した学生７名に半構造化面接を行った。データは 2009 年９月～10 月にかけて収集した。

Ⅲ．倫理的配慮

研究の主旨、調査方法、個人情報保護について十分に説明し、協力同意を得られた場合のみ対象とした。参加は自由意志に基づくもので、実習評価等の成績には影響しないこととした。

Ⅳ．研究結果

学生が介護実習において施設入居高齢者との関わりで肯定的体験のプロセスは、段階的に【見知らぬ施設での消極的な動機】【感情を察知し手探りながらあきらめない】【成功感・自己改革】というそれぞれのコアカテゴリーで構成される。これらは段階的に進んではいくが、学生と施設入居高齢者との関わりの過程は、あきらめない関わりを中心に自身の実習に臨む気持ちの葛藤と施設入居高齢者の感情を鋭敏に感じ取りながら判断、行動していくということが相互に関係しながら進み、その結果、肯定的体験に至っていた。

Ⅴ．まとめと課題

介護実習における施設入居高齢者との関わりで、肯定的体験に至る学生の努力や工夫、自身の実習に臨む葛藤、施設入居高齢者の感情を鋭敏に感じ、関わりを拒絶されてもあきらめずに関わろうとする姿勢から構成されていた。肯定的体験を得た学生はその感動や心の揺さぶりにより自己形成を促進させ、就労に対する意欲や将来につながる希望が更に高じたのではないかと判断する。肯定的体験プロセスの分析は、学生が施設入居高齢者と関わる際の取り組みかたや実習の成果を大きくする要因の検討、実習指導のありかたなど教育的活用に寄与するものと考える。学生と施設入居高齢者との関わりでは、実習場での的確な指導、助言の必要性が求められ、このためには教員と施設実習指導者との綿密な連携がより一層欠かせないものであることが理解される。

今回は、関わりを学生の視点に焦点をあてた分析であり、このような関わりが高齢者にとって満足感が得られる体験となっているかは明らかにしていない。相互理解の得られる良好な関係とはどのようなことなのか高齢者に焦点をあてた研究は今後の課題である。

文献

1）『改定版社会福祉士介護福祉士社会福祉主事関係法令通知集』第一法規、2009 年

2）厚生労働省「第 4 回介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」2006 年

3）横井光裕「介護実習におけるコミュニケーション技術の習得に関する研究」『大阪体育大学短期大学部紀要』第 10 号、33－45、2009 年

4）柊崎京子、田中秀明、中野いずみ、戸澤由美恵「介護実習における学生の不安（3）－介護実習不安尺度の因子構造と 2 年間の時系列変化－」『共栄学園短期大学研究紀要』第 19 号、98－109、2003 年

5）横山さつき「介護実習における学生の不安に関する因子分子的研究」『中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要』第 9 号、125－133、2008 年

6）柊崎京子「実習初期段階学生の状況に即したコミュニケーション教育の検討―第 1 段階のコミュニケーションに関する学生の自己評価をとおして－」『共栄学園短期大学研究紀要』第 23 号、70－87、2007 年

7）古川和稔「学生の語りに着目した実習指導法-実習記録には記されない「真実」に焦点を当てる試み-『介護福祉学』Vol14 、196－202、2007 年

8）木下康仁『ライブ講義 M-GTA　実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007 年